

メッセージアウトライン ヨハネ18：12~27「人間の限界」

イエスはイカリヤのユダの導きによってやって来た兵士と役人たちによってゲッセマネの園で捕らえられた。これはイエスが自ら彼らに身をまかされたのであって、神の救いの計画の実現のためにそのようにされたのであった。(12)

イエスは縛られて、まず大祭司カヤパのしゅうとアンナスのところに連れて行かれた。(13)アンナスは当時のユダヤで宗教的権力者として最も強い権力を持っていた。他の福音書ではイエスがカヤパのもとで裁判を受けたことが書かれているが、このヨハネの記述ではアンナスのもとのさばきに焦点が当てられている。「シモン・ペテロともうひとりの弟子は、イエスについて行った」(15,16)他の弟子たちは逃げてしまったのに、イエスについて行くとはなかなか立派にみえる。この「もうひとりの弟子」とは伝統的にはヨハネのことと考えられているが詳しいことはわからない。勇敢にイエスについて行ったペテロに、イエスを知らないで最初の否定の返事をさせたのは門番のはしため(女性の召使い)であった。(17) 時は過越の祭りのころ(三月後半)でかなり寒く、ペテロはしもべや役人たちに混じって炭火の回りに立って暖まっていた。(18)

19節から大祭司(この場合はアンナス)の前での裁判の様子が描写されていく。その尋問の内容は弟子たちのこと、また教えのことであった。イエスは弟子たちのことには少しも触れずに、自分は会堂や宮のような人が集まる場所で公然と話し、隠れて話したことは何もないと言われた。(20)律法によれば自分が自分についてする証言は真実とは認められなかった。→申命記19:15 それでイエスは「わたしから聞いた人たちに尋ねなさい」(21)と言われたのである。ここまで聞いていた大祭司の役人のひとりがイエスの答えぶりに腹を立てて平手打ちを加えた。(22) これに対してイエスはこの役人の無礼と罪を責められた。(23)ヨハネが描いているのはこのような堂々たる威厳を持ったイエスの姿で、このお方こそまことの権威を持った王なるお方なのである。つづいてアンナスはイエスを縛ったままで大祭司カヤパのもとに送った。(24) アンナスとカヤパの邸宅は同じ庭に面した場所にあったと思われる。

一方、立って暖まっていたペテロに回りの人々が「あなたもあの人の弟子ではないでしょうね」と言った。(25)この問いかけに対してもペテロは「そんな者ではない」と否定した。これで二度目である。三度目の質問はてごわかった。その質問者はペテロに耳を切り落とされたマルコスの親類でその時の目撃者であった。(26)

「それで、ペテロはもう一度否定した。するとすぐ鶏が鳴いた」(27)並行箇所→マ126:73~75,ルカ22:59~62

イエスがペテロについて言われていたことが現実となった。→ヨハネ13:38 ペテロの自信や自負にもかかわらず、イエスの予告されたことばどおりになった。彼はもはやそこにいることができず、逃げるように外に出ていって激しく泣いたのである。ペテロは逃げてしまった他の弟子たちと比べてよくやったかもしれないが、これが人間の限界であった。しかしこれはペテロだけではなくすべての人間に当てはまることである。この解決は、悔い改めて真の権威と力を持たれるイエス・キリストに立ち返り、あわれみをいただいて歩み出すことから始まる。